人文論叢（三重大学）第20号　2003. 3

アフリカ文学と Oral Literature（1）
—— Mazisi Kunene, *Emperor Shaka the Great*

赤　岩　　隆

要旨: いわゆる Oral Literature は、新世紀の文学を切り拓く大きな可能性を持っている。なかでも、アフリカ（サハラ以南）のそれは、外のどこよりも豊かな蓄積に恵まれている。もちろん、文学をする場合、もともと無文字社会に属すアフリカ人の作家は、現実問題として、いずれかの外国語に頼らなければならない。が、そうした特殊事情は、必ずしもネガティヴな意味ばかりを有するわけではない。なにより、文学というものは、科学とは根本的に異なり、本質的にシニカルな特質を持つ有機体だからである。その有り様を探るというのが、本稿を第一回としてはじめる、アフリカ文学と Oral Literature との関係を具体的に考える論考の目標である。

今回の作家は、南アフリカの Mazisi Kunene である。かれの書いた *Emperor Shaka the Great* を取り上げる。いまやアフリカ文学の古典の一つとなった感のある、この作品の分析を通じ、いかに文学が Orality と Literacy のあいだを、あるいは、書き言葉の次元で自国語と外国語とのあいだを橋渡しし、Oral Literature という遺産を未来に向かって生かしてゆけるか考える。そして、その過程でみえてくる、文学とはなにかという根本問題に対する答えのヒント、および、Oral Literature というものの提起し得る、文学の可能性の輪郭を捉えることを議論の最終的な目標として据える。

1

アフリカ文学の可能性という問題について考えるときに、いわゆる oral literature というものの存在を想起するのは、きわめてまっとうな連想だといえるだろう。たしかにアフリカにおいても全般的な都市化や生活様式の西欧化は進み、一般に oral literature と呼ばれるものをこれまで培ってきた生活環境は崩れつつあるのかも知れない。土のなかからすら掘り起こすことのできる堅固な文書というものに頼らない、「口承」という壊れやすい伝承形態が成立するには、そうした環境を支える人間と、それら人間の集合体であるコミュニティの存在が必須の条件となるが、それがアフリカにおいて徐々に失われつつあるのである。けれども、それでもなお、遺された遺産は豊かだといってよいだろう。少なくとも、創造的な仕事をしようとするすべてのアフリカ人が、意識的にしろ無意識的にしろ、多かれ少なかれその影響を受けることになるといえるほどには豊かである。

が、問題がないわけではない。というのも、oral literature の洗礼を受けたアフリカ人が、文書によりつつ創造的な仕事をしようとするならば、どうしても解決しなければならない、ある困難な問題に直面することになるからである。すなわち、oral literature の流儀で発想された仕事というものは、文書化された瞬間に、別のものへと容易に変質してしまうという問題に、である。そうした変質をどのように食い止め、oral literature という貴重な遺産を「文字」の

うえに昇華し生かしてゆくか。orality と literacy という、およそ異質とみえる次元のあいだをどのように往復し無事橋渡しし遂げるか。いずれにしろ、気の遠くなるような話には違いない。

とはいえ、直面すべき問題が複雑であればあるほど、創造的な仕事がその輝きを増すというのも事実である。しかも、そうした問題は、望んだからといって与えられるものではない。とするならば、それにむしろ積極的にコミットすることで、アフリカ人は、直面する問題の困難さのぶんだけ、具体的な創作活動の場において有利な立場に立てることにもなるだろう。以上のようなアフリカ文学の有り様を研究する、それが今回以降の論考の一貫した目標である。

2

Mazisi Kunene は、一九三〇年、南アフリカのダーバンで生まれた。地元のナタール大学でズールー族の歴史および詩について勉強したのち、イギリスに渡りズールー語による詩の研究を続けた。ANC をはじめ政治的活動に精力的に関与するいっぽう、自身の言語であるズールー語で詩や劇を書き、自らそれを英語に翻訳するという特徴的な方式をとりながら、一九七〇年 *Zulu Poems*、七九年 *Emperor Shaka the Great*、八一年 *Anthem of the Decades*、八二年 *The Ancestors & the Sacred Mountain* といった作品を本にして出している。また、そうした創作活動のかたわら、亡命中はアメリカで教鞭をとり、アイオワ、スタンフォード、カリフォルニアといった大学で教えた経歴を有する、南アフリカ屈指のインテリ作家である。

そうした略歴、とりわけ、その創作方法の概略をみても解かるように、Kunene の oral literature との関わりは、なにより意図的なものだといえるだろう。かつて Christopher Heywood 編集の論文集に、Kunene は、'South African oral traditions' という論文を寄せ（Kunene. 1976）、また、別誌においては、'The Relevance of African Cosmological Systems to African Literature Today' という文章を書いている（Kunene, 1980）。とりわけ前者は短い文章ではあるが、表題の示すとおり、南アフリカの口頭伝承について（ときにアフリカ全般にまで及ぶ）自身の考えを述べたものであり、ここでの注目に値する。以下にその要点を纏めておこう。

まず第一に、Kunene は、oral literature を社会との関係から捉えるよう主張する。といっても、その態度は、いわゆる社会学的文学研究といった立場からは程遠い。というのも、かれがそう主張するのは、両者の関係が、文字による文学とそれを含む社会とのあいだには、けっして認められない程度に濃密なものであり、およそ文学成立の根幹に関わるような性質のものだからである。文字による文学全般を評して、かれは次のように書いている。

> 言い換えれば、文字を使用する社会における文学とは、いわば凍りついた文学に外ならない。その文学の氷を解かすことができるのは、長年の特殊な訓練を通して獲得される特殊な技巧を持つ一部の者たちだけなのである。
> （Kunene, 1976, p. 28）

それに対して、無文字社会においては、コミュニティの構成員の全員が例外なく文学に参加する。ひとつには、文学に担わされた役割が決定的に違うからである。そこにおける文学は、

・・・強制力を持った重要な倫理の体系であり、歴史的出来事の貯蔵庫、哲学的思索の集合体、過去と現在を世代的に繋ぐばかりか、全宇宙的現象に亙る論理を産みだす連合体なのである。
（Ibid., p. 28）

したがって、それに参加せずして個々の構成員が日々の生活を送ることも、コミュニティそれ自体をまとまりあるユニットとして維持することも不可能となる。文字どおり幼児から老人に到るまで、そこから細かい生活の指針を受け、また、貴重な智恵を得ながら、コミュニティの安寧と躍進に貢献するのである。

oral literature が成立するのは、そうした社会においてであると、Kunene はいう。あるいは、相互交換的に、oral literature の多面的機能の発動を俟ってはじめて、無文字社会はその生命を得ると。とするなら、その関係のもとでは、壮大な叙事詩的歴史が、巧妙な智恵が、創世の神話や数々の伝説が、ごく日常的な世界と背中合わせに存在することにもなる。そうした有り様を西欧流にいえば、原始的というのだろうが、それに対して、もちろん、Kunene も負けてはいない。

明らかに、文字に頼る文学と口承を旨とする文学とでは、相互に異なるものを目標として想定している。前者は明確かつ詳細であることを —— ときに情況や出来事の長々しい描写を —— 目標とする。つまり、入念な描写によって、出来事の絵画的なイメージを伝えようとするのだが、他方、後者は出来事の再現ではなく、出来事の社会的意義に関わろうとする。要するに、後者においては、評釈しようとする出来事があらかじめ皆に知られているものと想定され、ゆえに、聴き手のなかに知らない者がいる、あるいは、思い出させる必要があるとする場合にも、ただ出来事の梗概を復習するに止めることになる。こうした必要から生じる「梗概」により求められる技巧は、伝えようとする倫理的論旨の全体に構造的に見合うものでなければならないから、かくて、口承詩に用いられる象徴とは、一個の共通言語として、すなわち、一般化された性質を伝えるための近道として機能することになる。
（Ibid., p. 31）

Kunene は、そうした社会との濃密な関係を持った文学を、'communal' と呼び、また、「生きた文学」という表現を使って称揚している。もちろん、この「生きた」という形容は、云わずも哉のことながら、oral literature というものが、演じられる場としての聴衆の集まりと、個々の演じ手の具体的なパーフォーマンスなしには成立し得ないとするジャンルの基本用件にも通じている（Finnegan, 1970, 1977）。そして、結論として、Kunene はひとことこう付け加えている。すなわち、「アフリカの口承文芸の真の解説者は、外ならぬアフリカ人自身でなければならない」と（Kunene, 1976, p. 41）。それほどまでに、かれの考える oral literature は、文字による文学からは肯定的に隔絶されているのである。

3

にもかかわらず、Kunene は、文字に依りつつパフォーマンスしなければならない。しかも、

最終的には英語という外国語によりつつそうしなければならない。しばしば指摘されるアフリカ文学のジレンマであるが、それに憑かれたようになる作家が、Kunene をはじめ、Ngugi wa Thiong'o 、Okot p'Bitek といった、なにより oral literature と自国語による文学というものの可能性に拘泥する先鋭な意識の持ち主であるのは、当然の符牒といえよう。自身の作家としての本来の姿が、oral literature の指示する方向にあるのかも知れぬとしながらも、現実的には文字に、英語という外国語によらなければならない。とするならば、せめて自国語でやりたい、そう考えたとしても少しも不思議ではない。同じく文字を使用するにしても、そのほうが自身の理想とする文学により接近することができるのではないだろうかと。が、それすら叶わぬとするならば、いったいどうすればよいか。上の三人がそれぞれに試みているように、自らの作品をいったん自国語で書いてから、あらためてそれを英語に直してみる。それにより微妙な距離をおく。そうした試みは、実際、不器用な拘泥りというよりは、きわめて真摯な想いに発するぎりぎりの挑戦だったに違いない。

そんなふうにして、Kunene は、*Zulu Poems* や *Emperor Shaka the Great* といった作品を書いた。本稿では、そのうち後者を中心に論じたいと思っている。なによりそれは、一万七千行にも及ぶ一大叙事詩であり、口承から外国語の文字で書かれたテクストへと到る、遠い変遷に纏わる諸々の事柄についてもっとも多く教えてくれるはずだからである。著者自身、前述の論文において、いわゆる叙事詩が oral literature のうちもっとも高度なものであると随所で指摘し、実際後半の数ページにおいては、そうした認識に則した形で、Shaka の生きた時代に注目しつつ具体的に論じている。それによれば、oral literature は、そのジャンルの特性からして、それを包含する社会の情勢を如実に映し出すのだが、Shaka の時代といえば、Zulu 族全盛の時代であり、したがって、そこから産み出されたところの oral literature も、そうした社会的隆盛を必然的に反映して、充実した出来ばえのものになっているはずと考える。もちろん、Kunene は、その時代を詳しく研究し、いまに伝わるそれら oral literature を細かく収集した末にこの大作を書いたのだろうから、議論の対象とするには最良のテクストであるに違いない。

だが、その前に、Shaka とはいったいだれなのか、ざっと復習しておく必要があるだろう。ごく一般に信じられている話を総合すると、おおよそ次のようになる（Morris, 1971, Ritter, 1978)。Shaka の生誕は一八世紀の終わり。一七八七年という年号が通常使用されるが、正確なところは解かっていない。死んだのは一八二八年と、こちらのほうは確定している。というのも、その頃にはすでに、ポート・ナタール（ダーバン）にイギリス人が進出しており、その記録が残っているからである。進取の気性に富む Shaka 王が、積極的にイギリス人に接近したこともあって、Zulu 族とその歴史については、イギリス側に比較的豊富な文書資料が残されている。王位に就いた Shaka は、型破りとも思えるような性急さで改革に乗り出す。とりわけ有名なのは、その軍事組織の改革である。能率の悪いそれまでの投げ槍をやめ、接近戦で闘う短い槍を採用した。それによって盛んに戦争を行ない、それまではほんの小国にすぎなかったのが、瞬く間にナタール一帯を統合した。そのせいか、「血に飢えた野蛮人」とも、あるいは、それとはまったく正反対に、「英明の建国者」とも評される。生い立ちは不幸なものであり、その最期は、共謀した二人の異母弟に若くして殺されるという酷く悲惨なものであった。

じつは、*Emperor Shaka the Great* の冒頭部には、Kunene 自身による長い序文が付いていて、Shaka 王のことはそこでも詳しく紹介されている。それによると、Shaka の生まれたのは、一七九五年となっている。上記の年号とは八年の開きがあるが、そうした差異が生じるのは、

kunene の依拠する情報源が、上のそれとは異なっているからである。Kunene の情報は、なにより自身の取材に依る。緒言に明記されているとおり、「部族の歴史を語り継ぐことに大いなる誇りを見出す父方母方の親類縁者がいればこそ」、この仕事は可能になった。すなわち、身近に存在する oral literature を、Kunene は自らの第一の情報源として採用したのである。Kunene は、はっきりとこう書いている。

> そうした伝統、文学作法を通して、わたしは南アフリカの歴史について多くを学ぶことができたのです。
> (Kunene, 1979, p. xi)

いうまでもなく、これは Kunene による植民地主義に対する挑戦である。後者によれば、かれの主張する年号などあてにならない。なぜなら、oral literature とは、学問対象という点ではなるほど興味深いものかも知れないが、歴史的信憑性には大いに欠けるいい加減なものにすぎないからである。それに対する逆否定、それが、この大作叙事詩執筆の重要な動機の一つであったに違いない。

とするなら、Kunene の否定は、単なる年号に止まらない。Shaka の人物及び業績の根本的評価から、Shaka を生んだ時代や環境に対する認識、果ては、Wole Ogundele の主張するような、orality の側から literacy の側に対する全般的な異議申し立てをも含む、じつに射程の広い否定であったはずである (Ogundele, 1992)。そうした射程の広さをなにより時代が要求していた。というのも、Kunene が自国語で *Emperor Shaka the Great* を書き、英語に直して本にした一九七〇年代というのは、Black Consciousness の運動が、南アフリカという国をアパルトヘイトからの解放へと突き動かしていた激しい闘争の時代だったからである。

4

そのようにして書かれた *Emperor Shaka the Great* とはいったい何なのか。その副題には、'A Zulu Epic' とあり、実際、作中でも一貫してその姿勢を崩していない。が、いっぽう、oral literature 研究の第一人者である Ruth Finnegan は、サハラ以南のアフリカにおける叙事詩の存在それ自体に対し強い疑いを示し、次のように主張する。

> 叙事詩は、しばしば文字を使用しない人たちにとっての、あるいは、少なくともある段階におけるそうした人たちにとっての、典型的な詩の形式であると見做される。しかしながら、事アフリカに関するかぎり、驚いたことに、そうした考え方は通用しないように思われる。
> (Finnegan, 1970, p. 108)

こうした齟齬は、どのように説明したらよいのだろうか。

ひとつには、それでこそ、Kunene の異議申し立ての意味もあったと考えるやりかたである。西洋人の認識不足も甚だしいといった具合に。事実、oral literature という分野では、支配する者とされる者という関係の非対称性が往々にして浮き彫りにされる傾向にある。そもそもの接触の時点からして、一方的支配という非対称性の構築こそ、西洋人による oral literature 収

集の目的であった。言語学者によるものにしろ、宣教師たちによるものにしろ、政府の役人たちによるものにしろ、oral literature の研究とは、まず第一に、そのために始められたのである。もちろん、Finnegan の試みの土台にある目的は、なにより、そうした一方性からの脱却であったに違いない。が、問題は、それにしてもなお、という点にある。すなわち、それほどまでに植民地主義のつけた傷痕は深いのだと。

あるいは、こうも考えられないことはない。Kunene のいう 'epic' というのは、西洋流のそれを採用したものに外ならないと。屈指のインテリ作家である Kunene にすれば、少しも不可能な話ではないだろう。かれの身辺には、oral literature の原資料が有り余るほど存在した。それを、あくまでも素材の魅力や美しさを損なわないよう、西洋流に料理してみた。結果は、orality と literacy の見事なまでの橋渡し、融合に外ならない。そうした偉業に、アフリカの自律とその潜在能力とを認めるべきであると。

いずれにしろ、これは、アフリカ文学について考えようとするとき、頻繁に出会う困難さの一つに含まれる。対象となるアフリカ人作家が、Kunene のように、政治的なナショナリズムを有し、現実の政治運動にも積極的に加担し、知的で、それでいてアフリカの土に対して強い愛着を持つ場合にはとりわけそうである。排他的とも思えるほどの西洋の否定と、それとはまったく正反対に、強く否定すればするほど英語による表現の先鋭化の深みへと足を突っ込んでしまうという自然な成り行き。ジレンマと呼ぶには、あまりにも悲劇的な二極対立の真っ只中に立たされているわけであるが、それだからこそ素晴らしい作品が生み出されるという皮肉。本稿の、*Emperor Shaka the Great* という作品もそうした作品の一つに違いない。

それが証拠に、この作品はけっして oral literature ではない。隅々まで文書化されている。聴衆を前にしてパフォーマンスされるわけでもなければ、口承により伝播され保存されるわけでもない。なにより書かれたテクストとして発信・伝達され、それぞれの読者の手で解読されるべきものである。それは、媒体として、音声ではなく文字を選択した時点で担ってしまった結果に外ならないが、大胆にも、Kunene はそこからスタートしてみせる。いうまでもなく、目指すべきは、oral literature の方向に向かってである。すなわち、最初に被ったテクストという堅い殻を、制作というパフォーマンスを通じ見事破ってみせようというのである。いうなれば、orality と literacy とのあわい、Kunene はそれを発見しようとする。そうした古いアフリカというものに確実に接続した形での新しいアフリカの発見、それは同時に、悪辣な植民地主義からのアフリカ人によるアフリカの歴史の奪還をも意味したはずである。

5

作中描かれる世界においては、随所に oral poet が登場する。彼らの歌う詩のなかで特に目立つのは、一般に praise poetry と呼ばれるものであるが、乱世を生き抜く正真正銘の英雄 Shaka の力強い姿を描くとしたら、そうなってむしろ当然だろう。以下に、そのうちの一つを具体例としてみてみよう。

場面は、Shaka の軍隊が宿敵 Zwide の大軍を打ち破り、堂々の凱旋をした折のもの。それを迎える praise poetry の引用である。

The black thunderhead of Mageba

That roared over the mountains of Nomangci ——
It exploded behind the village of Kuqhobekeni
And the bellies of men were chilled.
It seized the shields of the Maphela and the Mankayiya
regiments;
The little melons were left half eaten by iziMpaka regiment.
He seized Nomahlanjana, the son of Zwide, of the Mapheleni
regiment;
He swallowed up Nobengula, the son of Zwide, of the
Mapheleni regiment;
He killed Mpepha, the son of Zwide, of the Mapheleni regiment;
He killed Dayingubo, the son of Zwide, of the Mapheleni
regiment;
He seized Sonsukwana, the son of Zwide, of the Mapheleni
regiment;
He eliminated Zwide's wife of Lubongo clan;
He destroyed Mtimona, the son of Gaga, of the Mapheleni
regiment;
He killed Mhondo-phumela-kwezinde of the Mapheleni
regiment;
He killed Ndengezi-mashumi of the Mapheleni regiment;
He destroyed Sihlamthini among those of Zwide;
He killed Nqwangube, the son of Lundiyane.
He was our hero, as he turned his shield in all directions.
Come back, Great Destroyer, it is enough!
(Kunene, 1979, p.175)

通常一般には流通していない最初の版のユネスコ版には、まだ十行ほど続きがある。原文は入手し難いので、ここは翻訳でみておく。

そなたは、ズウィーテを宿なしの匪賊に変えた。
そしてズウィーテの息子の運命もそのようにしてしまった。
シャカよ、そなたは、ズウィーテとその運命を完膚なきま
でに破壊したのだ！
シクニャーナは、さながらそなたが連れ添った女のよう
そなたがンカンジャの森に近い囲い地で坐っているのを、
その男は発見した。
あわれな男よ、その男は、そなたの軍隊が魔法の力をもっ
ていることを知らなかった。
老いた角蝮を殺した男、彼らはそなたに

　戦を挑んだ。
冬と夏が違うようにそなたらは、
　ントムバージ女王とその息子たちとは質が違うのだ！
（土屋　哲訳，『偉大なる帝王シャカ』，1978, vol. I. P. 288）

この一戦の勝利によって、Shaka は名実ともに一帯の盟主となった。したがって、これを寿ぐ詩も、当然、それに見合ったものでなければならない。上記引用は、いわゆる宮廷詩人の一人 Magolwane によるものとなっているが、

Yet none could surpass in skill Magolwane,
Who was the beautiful voice of the Ancestral Spirit.
He scattered words like sparks of fire.
He beat the ground with his ceremonial stick.
His voice trembled and boomed to the cliffs.
（Kunene, pp. 174-5）

Kunene 自身の解説によれば、Magolwane は、同じく作品中に出てくる Nomnxanxa と並ぶ、「ズールー黄金時代の偉大な詩人」の一人であるとのこと（Kunene, 1976, p. 41）。そうしたバンツーの宮廷詩人のことを ‘imbongi（praiser）’ と呼ぶが、Ruth Finnegan はそれについてこう書いている。

imbongi は、次のようなものを記憶しなければならない。尊称名、数々の勝利、部族の長とその祖先の輝かしい資質。そして、公の場において支配者を褒め讃える際、それら記憶したものを長々しい大袈裟な詩の形に直して朗誦するのである。
（Finnegan, 1970, p.84）

引用中、「尊称名」と訳したのは、英語では ‘praise names’ というのだが、Kunene の説明によれば、ズールーの社会において通常使用される、その人物の成した「英雄的な業績や傑出した行為を言い表す」ためのものである（Kunene, 1979, p. xxviii）。なお、同じところで Kunene は、praise poetry の正式名称は、poems of excellence とすべきであるとして、一般に流布する誤りを訂している（Ibid., p.xxix）。

以上を総合するとこうなるだろう。praise poetry において重要なのは、まず第一に、名前であり、事跡だということである。先の引用は、もちろん、むしろその極端な例に属すのだろうが、それにしても、それらが本質的に、少しも lylical なものでないことだけは確かである。したがって、それらは、Kunene も Finnegan も指摘しているように、「場」や「社会的コンテクスト」といったものと密接に関係することになる（Ibid., p. xxx）。それら場やコンテクストは、概ね、公のものと決まっており、発話者にはなにより「素晴らしい声」（朗誦する力）がその必須の才能として求められる。そうした諸条件が揃ってはじめて、先に引用した言葉はその力を余すことなく発揮することになるのだろうし、あるいは、それが求める oral literature というものの現場の姿に外ならないのだろうが、だとしたら、書かれたテクストの上で、どのようにして Kunene はそうした諸条件や現場と接続しようというのだろうか。

6

'Laughter like perfumed winds brings grief' という、美しいタイトルの付けられた第一四章をみてみよう。Matiwane の軍を破り、いまや無敵の王となった Shaka は、「生命に充ち溢れ／馥郁たる春風を思わす笑い声で周囲を満たした」。そこで、Shaka は愛でたい布令を出す。

Ordering a great festival to be held throughout Zululand.
Each family and clan was to make a sacrifice to its Ancestors.
Young men and women had to stage their own gala dance.
Everywhere new songs and new poems were composed.
Shaka himself led the regiments to the mountain;
Here, it was said, King Jama used to gaze at the horizon.
The great concourse of regiments raised their voices and sang.
They circled the mountain, imitating the giant river-snake.
Crowds followed the king to the flat top of the mountain
There to witness the games of strength initiated by Shaka.
People were adorned in their elegant finery,
Walking proudly, like girafes following the path of the forest.
When all the crowds had assembled,
A black bull was let loose into the arena
And ten young men were to kill it with bare hands.
(Kunene, 1979, p. 319)

このあとには、闘牛の描写が数十行に亙って続く。その描写は、詳細かつ鮮明であるがゆえに、読者にその場の祝祭的な気分を彷彿とさせ、それによりテクスト内へと参加するよう読者を誘う。そうした祭りの詳細に馴染みのあるアフリカ人が読者である場合には、もちろん、効果は何倍にも増すだろう。

After this event huge fires were lit to roast meat.
A season of plenty and fun dominated throughout Zululand.
In many regions large fires could be seen
Attesting to the feasting of this festival.
From afar could be heard the raised voices singing in the night.
By their songs they invited others,
Until the whole nation seemed absorbed in song;
Mbiya's desires seemed now fulfilled.
Women wore their chosen feathers of birds of paradise,
Blending the beauty of their adornments with those of the king.
He was tall and splendid in his white and green epaulettes of
beads.

（Ibid,. p. 321）

その後も陶酔と高揚のうちに祝祭は幾日も続く。誰もが着飾り、踊りを踊り、王を讃える歌が国じゅうに谺する。Shaka は、さらに布令を出し、「ズールーランドでかつてなかったような大規模な狩りを催すよう命令する」。

Early at dawn, as the dew still covered a man's knee,
The great hunt set out in its variety of names and families.
It sang the ancient hunting song of King Ndaba:
'You hunted in the forests and the forests sang:
"All hail! All hail, thou ruler of nations!"
The wilderness teems with bucks——
Gifts of friendship shall be of the meat of antelopes!'
The whole region resounded with hunting poems and songs.
Dogs barked from all sides like a tumultuous chorus.
（Ibid., p. 330）

A great concourse drove herds of animals in the king's direction.
The bedlam of sounds, of animals and people, filled the region.
Hunting dogs leaped and barked like branches in the whirlwind.
From afar a great cloud of dust swirled to the heavens.
Large herds of elephants and awkward giraffes beat the ground;
A great commotion of beasts and birds filled the valleys;
Guinea fowls with broken wings screamed to heaven for mercy.
Young boys rained their hunting weapons on them,
Hoping to earn their beads of honour.
The antelopes thrust their limbs into the air;
And by the power of the intestines they leapt above the earth——
It was as though some furious wasps had been let loose on
earth.
（Ibid., pp. 330-1）

ここに描き出されているのは、凄まじいまでのヴォリュームの「音」である。狩人たちの歓喜の歌声、それに呼応するかのような猟犬たちの吠える声、そして、狩られる獣の群れのあげる悲痛な哭き声。逃げまどい、追いつめられ、行き場を失った獲物たちが狂った咆哮で虚空を充たす。大地に響くその無数の足音。断末魔の叫喚。大混乱のなか埃が宙に舞い立ち、世界が揺れる。

が、ひとたび狩りが終われば、ふたたび秩序が取り戻される。

The men of Zululand sat on the open ground.

A high pile of the hunters' kill lay sprawled before them.
Young boys rushed hither and thither collecting firewood,
Making large fires on which to roast meat for their elders.
Many tales were told in jest.
Some re-enacted the great episodes of the hunt;
Some began shouting poems of excellence of the great hunters;
Some sang songs that were newly composed for the occasion.
From all sides were many voices of celebration.
Above this din were heard the flutes of the Bhele clan.
(Ibid., p. 332)

宴の平安。が、たしかにここにも、ざわめく歓喜の「声」は存在する。自身の狩りを自慢する声。歓びを歌に換えて発散する歌声。狩り場の大混乱のぶんだけ、狩りの成功を祝う声が喧騒のように盛り上がる。そこに笛の音。愉快なダンスが始まる。

と、そうした歓喜と祝いのただなかに、悲報が届く。王の母 Nandi の臨終が近いという報せである。天国と地獄の落差。ぴたりと動きが停止し、静寂が辺りを領する。が、それでも、「声」の根の断たれることはない。王の片腕である Ngomane の悲しみの声が、いきなり夕暮れの静寂を突き破る。

Lord of Nations, scion of Jama, of Ndaba,
Of Phunga, of Magaba, of Ntombela, of Nkosinkulu,
Child of the great kings, of Mdlani, of Zulu, of Malandela,
Wild one, who triumphed in many battles ——
We have lost at last by the judgement of the eternal circle.
The great Mother of our Nation is dead.
We are stripped naked of our cloak for all seasons.
We who were warm and comfortable are turned into orphans.
The earth is covered with our tears.
Where shall we hide from this fearful season?
The lion of death has entered our house:
It is trampling freely on our sacred shrines.
We run into the mountains, carrying our grief on our heads.
How enormous the river that swallows our children!
(Ibid., p. 334)

それまでの歓喜の歌声が、慟哭と号泣に取って替わられる。悲しみに耐えかねて泣き叫ぶ声、暗い悲しみのコーラス、哀悼の歌。

Shaka sang a song no one had ever heard before.
His whole body shook and trembled as he sang;

His voice was deep as though from some gorge.
Others began to sing the song, sending its message to all lands.
The sun closed her eye and her eyelashes of clouds were like a
    forest.
Over and over the solemn hymn was sung,
Its words intermingled with tears and voices of grief.
(Ibid., p. 336)

Fearful was the occasion of Nandi's funeral.
Fierce songs of mourning burst amidst wailings of crowds.
Nandi of Nguga haunted the land like a shadow of a
    mountain.
Great gatherings of men and women sang solemn songs of
    mourning.
Each wave sought to excel the other with mourning.
(Ibid., p. 337)

厳格な服喪の期間が始まり、国は酷く荒廃する。が、国の存亡を左右し兼ねないこの危機を、外ならぬ「声」が救う。命を賭して王を諌める声が、である（Ibid., pp. 344－6)。王は服喪を中止し、御霊送りの祭儀を行うよう命令を下す。祭儀を通じ国と王とは浄化され、本来の力を回復する。大司祭の唱える聖なる言葉、王の述べる誓いの言葉、荘厳な御霊送りの歌。復活した王を讃える詩が朗誦される。そして、祭儀のあとには、盛大な宴が待っている。

A new anthem of the new season began.
People sang and rejoiced with rich meat and nourishing beer.
Great crowds danced to new songs.
The children of the Palm Race shouted their anthems.
It was as though they had taken a drug of ecstasy.
Shaka leapt like a bird at the Renewal dance.
His very movements told the story of his life.
It was as though his father would ask again:
'What young man is this who dances like a spirit?'
He beat the earth, trampling triumphantly on its shoulders.
His great song of renewal rose with the high winds.
Some people have the power to look beyond the clouds;
Some people can see into future times;
Some people can hear the solemn voices of ancient times;
Some people can talk to things and make them tremble with life.
The old man danced in the open arena,
His mind now befogged by beer and festival ecstasy.

Voices, like a swarm of bees, filled the arena.
People opened their mouths and talked and laughed and sang.
(Ibid., p. 350)

この章において、物語は、生と死（華やかな祝祭と、葬儀あるいは服喪）の両極を体験する。生と死と復活という、ひとつのサイクルを描いてみせる。この物語の世界において起こり得る事件の可能性は、もちろん、すべてその両極のうちに、あるいは、そのサイクルのうちに含まれる。とするなら、ここで「声」の果たす役割はよりいっそう重大だといえるだろう。なぜなら、そうした両極のあいだの往復運動を成り立たせているものが、上でみたように、外ならぬ「声」である以上、すべての事件は「声」によって起動し、展開し、終息することになるからである。話はそれだけでは終わらない。なぜなら、そうした「声」の持つ意味は、作品全体についてもいえるからである。Senzangakhona の認知されない子として産まれ、苦労の末に王となり、数々の勝利を収め、ついには暗殺により幕を閉じるという Shaka の生涯こそは、この章の展開をそっくり裏返しにしたものに外ならないからである。意義深くも、この作品が、'prophecy' に始まり、'dirge' に終わっているのもたんなる偶然ではないだろう。どちらも言葉（もっと正確にいえば、「声」）によって成り立つものであることは、いまさらいうまでもない。

とするなら、「声」はただ空中を漂うだけの音ではない。その音を発するよう求める明確な場と、その要求に応じて音を具体的な形にする者とが存在しなければならない。oral literature 成立の必須の条件であるコンテクストとはそれを指していうのである。

とするなら、この第一四章は、あるいは、*Emperor Shaka the Great* という作品こそは、そうした条件の成立する、まさしくその瞬間のさまを生き写しにしたものだといえるだろう。たしかに、物語は文字で書かれたテクストの形で存在する。その意味では、生き写し以上のものにはなり得ない。が、歓びと悲しみのあいだに存在する「声という声」を総動員し、それをむしろ物語の主人公（原動力）にすることで、oral literature という異質の文学世界の次元に接続しようとするこの試みによりなし遂げられる転写というものが、実際、かなり精巧なものだということだけは確かである。作者の抱えていた問題が、文学上のものだけに止まらないという事実を考えるならば、なおさらそうした感慨は深くなるだろう。以下において、その事実との関係のあらましを短く確認しておこう。

7

植民地主義がもっとも露骨な形で政治の上に顕現したものをアパルトヘイトと呼ぶ。この Kunene の叙事詩が作品化された際の環境とはそれであった。*Emperor Shaka the Great* という作品を、無理やり一篇の oral literature と仮定するならば、そうした環境こそが、この作品の成立する「場」であり「コンテクスト」であった。したがって、作品の持つ意味という意味は、すべてそれとの関係において成り立つものである。文学上の意味もむろん例外ではない。Kunene が oral literature というとき、それはいかなる意味においても、アカデミックな学問分野などとは関係しない。なにより、それは現実的な「場」や「コンテクスト」において有効に機能すべき一個の武器だからである。アパルトヘイトという敵が否定し難い現実のものである以上、どうしたってそうならざるを得ない。とするならば、作者にノスタルジックな過去の

栄光など必要ない。Shakaという歴史上の人物に作者が拘泥するのは、現在を（あるいは近い将来を）見据えてのことでなければならない。oral literatureという伝統が復権しなければならないとしたら、それが現在の（近い将来の）情況を打開する力になるからである。もちろん、一冊の書物が直接的に爆弾や弾丸の代わりになるわけではない。が、この一大叙事詩が世に出た一九七〇年代の、いわゆるBlack Consciousnessの運動とは、そもそもそうしたものではなかったのか。丹念な草の根の運動が、華々しいサボタージュの打ち上げ花火に結局は勝るのだという認識に基づく努力の継続。そうした認識が正しかったことは、いうまでもなく、すでに歴史の証明するところである。

では、そうした緊迫した情況における「声」の復権の意味とは何なのだろうか。それは、ひたすら語り続けることの重大さの再確認ではなかったのか。この膨大な叙事詩がいやしくも形を成すことができたのは、このShakaといういまや伝説に近い人物の業績を、次の世代へと口承により語り伝えてきたからに外ならない。たしかに、その行為は、素朴な（悪くいえば惰性に近い）動機によるものだったのかも知れないが、そこで自らの行為を恥じてはいけない。なぜなら、その行為こそが、こうして偉大な叙事詩に結実し得るのだから。あるいは、Black Consciousnessの草の根運動もそうである。そう信じて継続することが結局は途を切り拓くのである。とするならば、あえて文字を捨て、「声」を復権させるというのも悪くない。Kuneneのこの作品は、いわば文字で作り上げた自らのテクストを自身で解体する。そうすることで、さまざまなoral literatureの集積に外ならぬこの作品を、ふたたびばらばらの「声」にして具体的な「場」へと解き放とうとする。それらの「声」は、長い時間の経過による磨耗を脱ぎ捨て、新しく生まれ代わった活力ある息遣いを取り戻すだろう。その息遣いは口から口へと伝達され、個々の人間に具体的な場で勇気を与えるに違いない。それこそ外ならぬ「口承」の意味なのではないだろうか。そのときはじめて、Shakaは伝説の衣を脱ぎ捨て、現実的な革命の旗印となるだろう。夢ではない。そうだと強く信じることが、夢を一個の現実へと変えるのである。

REFERENCES

Finnegan, Ruth. 1970. *Oral Literature in Africa*. Clarendon Press, Oxford.

1977. *Oral Poetry: Its Nature, Significance and Social Context*. Cambridge UP., Cambridge.

Kunene, Mazisi. 1976. South African oral traditions, in Christopher Heywood (ed), *Aspects of South African Literature*. Heinemann, London.

1979. *Emperor Shaka the Great: A Zulu Epic*. Heinemann, London.

1980. The Relevance of African Cosmological Systems to African Literature Today. *African Literature Today*, 11.

Morris, Donald R. 1971. *The Washing of the Spears*. Lowe and Brydone, London.

Ogundele, Wole. 1992. Orality versus Literacy in Mazisi Kunene's *Emperor Shaka the Great*. *African Literature Today*, 18.

Ritter, E. A. 1978. *Shaka Zulu*. Penguin Books, London.

M. クネーネ／土屋哲訳　1979『偉大なる帝王シャカ』(1)（2）岩波書店